

朝鮮半島系住民集住地域の都市民俗誌

福岡市博多区・東区の事例から

島村恭則

A Popular Urban Chronicle of Neighborhoods of Korean Residents: The Examples of Hakata-ku and Higashi-ku in Fukuoka City

はじめに

- ① バラック集落の暮らし
- ② 団地の暮らし
- ③ 団地建替え計画
結び

【論文概要】

本論文では、西日本の中核都市の一つ、福岡市の朝鮮半島系住民集住地域を対象に、その生活世界について民俗誌的記述と考察を行なった。記述の過程では、当該地域の生活世界をめぐるさまざまな民俗誌的データの提示・分析を行なつたが、本稿の記述全体を通して明らかになったことは、およそ次のとおりである。

朝鮮半島系住民は、日本敗戦＝朝鮮半島系住民解放直後の混沌とした環境の中で、さまざま「生きる方法」を生み出し、実践する」とによつて、自らの生活世界を構築してきた。しかし、その生活世界は、一部を除き、やがて行政による立退きという形で再編を余儀なくされる。これに対しても、さまざまなかたちでの交渉や抵抗が「生きる方法」そのものとして実践された。そして、その交渉、抵抗の末に、最終的には立退き、代替団地への移転を受容するが、それは、単なる従属的な受容ではなく、交渉によってある程度の主体性を獲得した上での受容であつた。

そして、ひとたび再編後的生活が開始されると、ふたたび旺盛な「生きる方法」の実践によって主体的な生活世界を構築していくのである。その後、近年、新たな団地建替えの計画が浮上してきたが、そこでも朝鮮半島系住民の主体的な利益を最大限に確保すべくさまざまな交渉を行なつてゐる。そして、最終的には、行政側主導の建替え方針を受容したものの、受容後の生活については、すでに、再び「生きる方法」の巧みな実践によって主体的に生活世界を構築しようとする意気込みが生まれている。

こうしたプロセスからわかることは、朝鮮半島系住民における生活世界の展開とは、自らのおかれた環境や行政、権力との対峙の中で、「生きる方法」を生み出し、実践しながら可能な限りの主体性をそこに構築しようとする過程であるということである。そして、そこで展開される「生きる方法」こそ、当該フィールドに暮らす朝鮮半島系住民の「民俗」の内実そのものなのであつた。